



本のある空間

塚 口 眞佐子

(学芸学部インテリアデザイン学科准教授)

応接間の書棚

そういえば、応接間の書棚に豪華な全集や百科事典が並んでいた、そんな記憶のある方も多いのではないだろうか。誰も読みはしないケース付き豪華本が、うやうやしく扉付きの書棚に納まっていたものだ。もうちょっと読書好きの家庭なら、吉川英治全集や日経新聞社の「私の履歴書」だったかもしれない。

この頃は家族のアルバムも書棚の重要なわき役で、ビロード表紙、革張り風装丁など、豪華版アルバムがごく普通だった。手を伸ばせば両親の若い頃の姿がそこにあり、父親の、また、祖父の買った本が並んでいる、そんな時代だった。そのうちいつの間にか、本に代わり輸入ウィスキーやブランディが並び出す。

応接間からリビングへ

リビングが応接間にとって代わる頃、ウェッジウッドなどブランド洋食器が登場し始め、洋酒は扉の向こうに隠れてしまった。今やそんな「ステイタス必須アイテム」は全て姿を消し、大型TVのみが主役を張っている。TVが大きければ大きいほど空間を圧倒し、その他のわき役は出番がない。考えても見れば、古くなれば処分するTVが主役で、古さが値うちと言えそうな蔵書や食器は、わき役にもならないのである。

ちょっと前までは、偉い先生の人物写真は、書棚にぎっしり並ぶ蔵書の前で、というのが通り相場だった。そのうちコンピューターに向かいマウスを動かす像が主流になり、今やパソコン前というのが陳腐化するものの、次の決め手がまだ見出せないでいる。リビングの次の主役は何に代わるだろう。案外、渋みのあるわき役として書籍が復活するかも知れない。

ホテルのライブラリー

そんな現代でも、ライブラリーをメインに掲げたスポットがある。目まぐるしく進化する東京ホテル事情の中でも、トップブランドを維持するパーク・ハイアットのロビーである。大勢の人が行き交うロビーではなく、どこがメイン・エントランスかわからないほど空間を絞り込み、知的で静謐なライブラリーが客を迎える。ANAシェラトンにライブラリーというバーがある。ひっそりとした方のバーで（ということは、もちろん高い方の）ここでは比較的静かな時間が過ごせる。ライブラリーが英国ジェントリー階級の男性の接遇空間だったせいだろうか、その他、数多くのホテルでも、

ライブラリーがゲストスペースに据えられている。いずれも騒がしさとは縁のない空間である。

書籍のある空間

書籍には人を沈黙させる力があるのかも知れない。読書とは自分に向き合う時間であり、自分の世界にこもる時間である。それが暗黙のうちに了解されているが故に、書籍のある空間では静けさが保たれるのかも知れない。同席の人物との会話を好まない時、人は本を開いたりするものである。リビングに書籍が復活するとしたら、それは知的空間というプレゼンスとともに、携帯電話やパソコンなどの過剰なコミュニケーションに疲れての、無意識の逃避かも知れない。

曲面壁をつかった書架

樟蔭の近所にある司馬遼太郎記念館の見どころの一つは、吹き抜けになった曲面壁にぎっしりと蔵書が並ぶさまである。この手法は書籍の開架収蔵法としては古典的で、ストックホルムの図書館、パリの図書館（古い方の）、大英博物館の図書室など世界各地に見かける。いずれも、圧倒的な分量の書籍が空間を支配する。書籍が財産として重みのあった時代の名残でもあるが、現代でも伝える空気感は同じであろう。その中では、もちろん書籍を開く人もいるものの、居眠りの人、見学だけの人、さまざまである。皆一様に、書籍の重圧のせい、空間のせい、押し黙って粛々と各自の行為を続ける。その静謐さが心地いい。

図書館の楽しみ方

図書館とは本を借り、学習するところ、だけと決めつけているのではないだろうか。書籍がつくり出す環境、静けさ、本の匂い、ページをめくる音、背表紙から伺い知る未知の世界、そんな空気の中一人で過ごす、そんな図書館の楽しみ方にも気付いてほしい。友人とのコミュニケーション・オンリーではなく、書籍を媒介にして自分と向き合う、人と群れない、そこから一人立ちした大人の女性に成長してほしい、そう願っている。さあ、ケイタイを切って図書館に入ってみよう。



大英博物館図書室